

Title	社會の起源
Sub Title	
Author	新館, 正國(Niidate, Masakuni)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1944
Jtitle	哲學 No.25/26 (1944. 6) ,p.1- 21
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	船田三郎教授還暦記念特輯
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000025-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社會の起源

新館正國

一

ひとり社會の起源についてのみではない。すべて人間生活の種々相における「報告の缺けてゐる」起源については、ひとは、その報告の缺落を補充すべき努力が猶ほ不充分な限界に遮られると、起源への彼の歴史的近接の努力を、直ちに起源そのものの臆測へと飛躍せしめざるを得なくなる。

これは、一面において、たしかに理性の後退ではあるが、決して理性が單なる想像の安逸を求めての後退ではない。その後退は寧ろ前進のための後退であり、斯かる理性の後退につれて現はれる臆測そのものは、却つて理性が、自分の停止状態の打開のために、そしてこの困難な仕事のためにのみ、「想像の翼に乗つて」試みる謂はゞ最後の突進なのである。虚構 (Erdichtung) が單なる想像

の翼に乗つて駆けめぐるのに對して、臆測 (Muttbauung) はその想像の翼に「理性によつて経験に結びつけられた導線」をかくしてゐる。⁽¹⁾ すなはち報告の缺落を補充すべき能力たる理性が、それ自身の努力の限界に立ち止まることなく、猶ほも想像の翼に乗つて最後の飛躍を試みるとき、そこに起源の臆測は現はれるのである。

従つてカントも次のやうに云つてゐる——「歴史の進行の中へ、報告の缺けてゐる點を満たすために、臆測を挿入することは一向差しつかへが無い。何故なれば、遠い原因として先立てるものと結果として繼いで起つたものとは、その間の推移を明らかならしめるところの、それらの中間に這入る種々の原因を發見するのに可なり確實な指導を與へることが出来るからである。」⁽²⁾

すべて生成においては、原因なくして、結果はない。生成の理解は、結果の把握と共に、原因への遡及によつて、初めてその全きを得る。しかも人間生活の種々相における起源は、われわれの理性にとつて、概ね臆測の對象として現はれるのみである。ここに、それらの起源に關する研究の學問的な重要性と困難とが在ると云へよう。その重要性の故に、學問は到底起源の問題から逃避することを許されない。しかるに起源の臆測は、起源の虛構と學問との中間者である。それを虛構の荒野から捉へ來たつて、學問の堂内に据え置くには、抑も如何なる注意や努力が拂はるべきであらう。

か。——いまこの問題の解答を社會の起源に關する研究について尋ねるのが、この小篇の主題なのである。

II

コントは「生理學の一分派なる腦髓生理學（譯註——心理學はコントにとつて未だ斯くの如きものであつた）は、人間の社會性（Sociabilité humaine）すなはち人間の社會的本能とその有機的條件とを分析して、これに基いて、外部的な諸條件を顧慮しながら、歸納的研究によつては到達され得ない社會の起源を演繹すべしである」と云つて、「同情本能を基礎とする家族」を以て社會の起源と見做したのであつた。⁽ⁱⁱⁱ⁾ しかしこれは彼のみに獨自の見解ではない。十九世紀のなかばを過ぐる頃までは、Rousseau \sim Condorcet \sim Herder \sim Klemm \sim Caspari \sim 殆んどすべての學者が、社會の起源については、コントと同じやうに、最初からその「歸納的研究」を斷念し且つ専ら「人間の社會性」の分析に基く演繹を開いて、單婚的な個別家族に社會の臆測的起源を認めてゐたのである。

しかし斯かる見解については、先づ第一に、その臆測が、何等報告の缺落を積極的に補充すべし

努力によつて裏づけられてゐないことが咎めらるべきであらう。起源の臆測は、報告の缺落から出發すべきではなくして、その缺落を補充すべき努力そのものから出發しなくてはならない。社會の起源は、云ふまでもなく一片の記錄をも止めることなく、既に悠久の過去に没し去つて居る。しかしそこに記錄がないからと云つて、社會の起源は、全くわれわれから切斷されて、無明の闇に沈み去つたのではない。何故なれば、丁度太陽が地上の最大の光源ではあつても唯一の光源ではないのと同じやうに、記錄はたしかに報告の最大の源泉ではあるが、必しもその唯一の源泉ではないからである。報告の源泉に、その太陽たる記錄のほかに、猶ほその星として或はローソクの焰として遺趾や遺物の在ることは、歴史の闇にとつて倖せである。起源の臆測における理性の努力は、決して直ちに起源の無記錄に絶望すべきではない。報告の缺落を補充すべき努力は、無記錄において限界に達するのではなく、遺趾や遺物の消失や未發見において初めてそれに達するのであり、そこに獲得された地盤において、臆測を虛構から學問へと解放する最初の手掛りを見ひ出し得るのである。

從つて起源そのものは「歸納的研究」によつては到達され得ないにしても、起源の學問的臆測には、先づ報告の「歸納的研究」がその不可缺の前提をなすべきであり、これを缺いた起源の臆測は、學問よりは虛構への傾向を帶びざるを得ないのである。

しかるに右の第一の缺陷が臆測の根底に現はれたそれであるのに對して、第二の缺陷は直接臆測そのものを左右するそれである。すなはちこの見解を抱く諸學者が社會の起源に單婚的な個別家族を認めたのは、何等の新しき報告の結果でもなくして、既に述べたやうに、彼等の「人間の社會性」に關する分析に基く演繹の結果である。従つて彼等の「人間の社會性」に關する分析が、彼等の臆測における「理性によつて經驗に結びつけられた導線」であることは云ふまでもない。しかるに「人間の社會性」は、社會における個人の性質として經驗せられるものであつて、社會そのものの性質として經驗せられるものではない。云ひかへれば、それは社會における個人的な經驗であつて、社會における純粹に社會的な經驗ではないのである。人間は、一面においてたしかに社會をつくるのであるが、同時に他面においては社會によつて包まれて在るものであることも亦見落されはならない。社會を全く離れた人間の存在は、一つの抽象である。彼が社會をつくるのも、彼が社會を離れて在るからではなくして、彼が社會に包まれて在るからである。すなはち人間は社會を、その外部からつくるのではなくして、その内部からつくるのである。「人間の社會性」とは、具體的には、彼が社會に包まれて在ることによつて現存する彼自身の性質であり、彼はこの性質に基いて、單なる社會ではなく、彼を包む社會を、更に自らつくつてゆくのである。従つて彼における眞

實の社會的な經驗は、彼を包み且つ彼がつくる社會そのものに關する經驗であつて、斯かる社會における彼自身の性質に關する經驗ではない。後者は、社會における個人の直接的な經驗ではあるが、その經驗の直接性の故に、これを直ちに社會そのものの唯一の基本的な經驗と速断してはならない。社會における個人の直接的な經驗は、個人と共に社會によつて、否、一層具體的に云へば、これら兩者の交叉によつて、初めて可能となるのであり、しかもこれら兩者の交叉に基く經驗に在つて、眞實の社會的經驗が個人による社會そのものの經驗であるのに對して、逆に、それは社會における個人そのものの經驗なのである。社會を「演繹する」經驗の基體は、眞實の社會的經驗に在るべきであつて、社會における個人的經驗に在るべきではない。社會の起源を單なる單婚的な個別家族にのみ認めるることは、後にその理由は詳細に述べるが、明らかに社會の起源に對する一面的な抽象であり、斯かる誤見の由來は、正に主として社會の起源を社會における個人的經驗から演繹した、その理性的導線の不當性に在るのである。

(註) 社會の起源に關する家族説において、注目せらるべきは、アリストテレスの見解である。⁽¹⁰⁾ 彼も亦、周知の如く、一面においては、社會の起源を「人間の社會性」に基いて男性と女性及び主人と奴隸との直接的結合なる家族に認めたのであるが、それと同時に他面においては、國家が本質的には家族や個人に先立つものであることをも指摘してゐる。これは、彼

自身においては、その「生成においては後なるも本然において先だつもの」といふ原理の適用であるとも云へよう。しかし彼が國家を本質的には家族や個人に先立つものとみたのは、彼における現在の社會的經驗に對する觀想の成果である。従つて彼の家族說における理性的な導線が、社會における個人的經驗に結びつけられてゐたとすれば、彼の國家說におけるそれは、直接に社會的經驗そのものに結びつけられてゐたのである。この彼の見解における二つの經驗的な基底は、如何なる具體的關聯に立つものであらうか。社會における個人的經驗は、社會そのものの經驗に先立つものではない。社會そのものの經驗が在つて、社會における個人的な經驗が在るのである。しかし斯く解するときは、アリストテレスが社會における個人的經驗に基いて臆測した社會の起源は、支持し難いものとなる。彼は、現在の社會的經驗に對する觀想のみを導線として、報告をみるべきであつたのである。しかし彼においても、起源の報告は缺落のまゝに残されて、起源の學問的臆測に對する不可缺な前提は未だ整へられてゐなかつたのである。

III

一八六一年に、バックオーフェンが、上古の女人統治 (*Gynäkokratie*) の宗教的及び法律的な特質を、古文獻に現はれた人類學的記述の斷片によつて明らかならしめると、こゝに社會の起源に關する研究には、劃期的が轉回が惹き起されて、つひに一つの新生面が拓かれるに到つた。すなはち從來の研究においては殆んど捨てゝ顧られなかつた報告の缺落を補充すべき努力が、バックオーフェンの試みを機縁として、俄かに注目の焦點となり、彼以後の學者は、もはや古文獻の記述に満足

することなく、進んで起源の報告に關する直接的な考古學的、人類學的な研究へと向ひ、やがて從來の報告の缺落は著しく補充せられるに到つたのである。この點は、たしかに異常な進歩であつた。

しかしながらそれらの新しき報告に基く起源の臆測に當つて、バッカオーフェン以後の學者が、同時にその臆測における理性的導線についても正しい把握を示したかといふに、事實は寧ろ逆に、こゝでは一層甚だしい誤見に捉はれて、社會の起源を虛構の深淵へと投げ込んだのであつた。すなはち彼等は、起源の臆測における理性的な導線を、それが本來結びつづき社會的經驗へと近づかせるところが、社會における個人的經驗からとも切り離して、人間生活の經驗からは凡そかけはれた生物進化論の假設へと結びつけて了つたのであり、斯くて社會の起源を、所謂「亂婚」(Promiskuität) の狀態若しくは「生殖の紊亂狀態」(Sumpfzeugung) に在るボルダニ族摘したのである。(この見解の代表者は、^(CH) H. G. 呂美也もなべ Morgan である、彼の譯者などは、Lilienfeld, Bastian, Lubbock, Post, Lippert, v. Hellwald, Kohler, Giraud-Toulon, Letourneau, Marx, Engels, Bebel などが居る) しかし彼等の見解は、既に同じ系統の學者によつて、その報告の事實性の側面から種々の検討が加へられて、幸ひにも今日では殆んど否定し去られたと云つてよい。「今日われわ

れの手許にある資料は……モルガンが人間社會の原始の狀態として指摘したやうな事實に味方する證據の片鱗をだに示すものではない。また後代の人間の歴史においても、斯くの如き性的無政府狀態が、いつか、どこかの人間集團を支配する原理となつたといふ證據は全くない^(大)のである。」(モル

ガン流の見解の事實性に對して批判的な態度をとつた學者には、Starcke, Westermarck, E. Grosse, Taylor, Peschel, H. Schurtz などが居り、その見解を事實性に基じて否定した學者には、Gräbner, Ankermann, W. Foy, W. Schmidt, Koppers, Rivers, Swanton, Lowie などが居る。) けれどもモルガン流の見解の學問的な缺點は、それが基づいた報告の事實性よりは、寧ろ一層深く、その臆測そのものの誤れる理性的な導線に在るのである。人間が類人猿に淵源し、現生人類が *Pithecanthropus erectus* から *Homo heidelbergensis* 或は *Sinanthropus* を経て、*Homo neanderthalensis* に到る進化の結果として、現れたといふことは、人間の經驗でないばかりか、生物の經驗そのものでもなく、僅かに生物の經驗に基く類推によつて打ち立てられた」つの假説に過ぎないのであつて、これは、この假説の狂信者以外の者にとつては、それに由つて具體的な生物現象を説明すべきものではなく、逆に、具體的な生物現象によつてその眞理性を吟味され、實證されるべきものなのである。しかるに今日の古生物學の資料を以てしては、現生人類が、果してゴリラの如き樹上型の一生物か

ら進化したものか、或はレムールの如き地上型の一生物から進化したものかは決定することが出来ず、更にピテカントロップスと類人猿との間、またはハイデルベルグ型人類とネアンデルタール型人類の間の進化段階の如き、それらを厳密に決定する何等の證據をも握み得ないのであり、確實な資料は、ネアンデルタール型人類についてさへ、それが「現生人類とは別種の人類」であり、「地上に跡を絶つた」と報告するに止まるのである。生物進化論の假説を以て現生人類の生活を臆測することが如何に粗雑な類推であるかは、自ら明らかであらう。すなはち斯くの如き假説を臆測に導き入れるときは、臆測そのものも亦必然的に假設化され、空想化されて、つひに獸臭を帶びた虚構へと轉落せざるを得ないのである。

四

以上において、社會の起源に關する從來の研究の二つの根本的な傾向に一瞥を與へたのであるが、これらは、相互に對立の關係に在るのでなくして、新舊の傾向として、繼起の關係に在り、社會の起源に關する臆測は、これらの研究の過渡を通じて、一面においてはたしかに臆測の根底としての報告の缺落を著しく補充し得たのであるが、他面においては、臆測そのものの理性的な導線

の把握において、つひに未だ不充分の域を脱し得ず、或は個人的経験へ、或は生物学的假説へとの導線の基體を求めて、いづれも社会の起源に關する學問的な臆測から虚構の殘滓を排除し切れるのである。従つて社会の起源に關する今日の研究は、既にかなりの效果を收め得た報告の缺落を補充すべき努力を愈々強化すると同時に、臆測における理性的な導線の正しき把握を心掛け、それを眞實の社会的経験に結びつけて、起源の學問的な臆測から虚構を、その最後の陰影に到るまでも、拂拭し去らねばならないのである。しかしこれら二様の努力は、社会學にとつて、固より並行して推進さるべきではあるが、必しも平等の研究價値を持つものではない。何故なれば、かの理性的な導線が直接に臆測そのものを左右するのに對して、報告の補充は單に臆測の根底を固めるに過ぎず、しかも理性的な導線の探求が直ちに社会的経験そのものへと向ふのに對して、報告の缺落を補充すべき努力は、その直接の對象が遺趾や遺物に在る限り、社会學においては、直接にこれらの對象を取扱ふ學問の研究結果の忠實な若しくは慎重な受容に集中されねばならないからである。すなはち遺趾や遺物は、先づ發掘され發見されねばならず、斯くて現在するに到つたそれらに對しては、地質學的に、古生物學的に、比較解剖學的に、或は考古學的に嚴密な検討が加へられるのであり、社会學は、それらの研究結果を、缺落せる報告の補充として、受け容れるに止まるのであ

る。従つてこの受容において、それらの研究結果に對する不斷の注意が必要であることは云ふまでもないが、斯くの如き注意は觀念的な努力であつて、實踐的な努力ではない。社會の起源に關する、社會學的研究の實踐的な努力は、専らその臆測における理性的な導線の正しき把握に在るのであり、補充せられた報告は、斯かる實踐的な努力の現實的な支柱たるに過ぎないのである。従つて社會の起源に關する社會學的研究の中核をなすべき問題は、次のやうに限定され得るであらう——

社會の起源に關する學問的な臆測において、その理性的な導線が結びつくべき眞實の社會的經驗とは何か。

右の問題に對する最初の解答は、斯かる社會的經驗が單なる社會的經驗と同一のものではないと云ふことである。何故なれば、現在におけるわれわれの社會的經驗は、決してその全部がそのまま原始人における社會的經驗に通するものではなく、しかも原始における社會的經驗に通する現在の社會的經驗のみが、起源の臆測における理性的導線の基體たるべきものであるからである。

原始人とわれわればかりではない、われわれ自身においてさへも、各人の社會的經驗そのものは實に千態萬様である。しかしこれに對しては、次のやうに問ふことが出来るであらう——それらの

多種多様な社會的經驗が、抑も等しく社會的經驗と呼ばれてゐるのは何故であらうか。この問ひには、社會的經驗を内容と形式とに區別して、答へるの他はない。すなはち社會的經驗における内容的な經驗は多岐復雜を極めてゐるが、その形式的な經驗は同一であり、この形式的な經驗の同一性によつて多種多様な内容的な經驗も亦等しく社會的經驗と呼ばれてゐるのである。しかしこれだけでは、問ひは未だ充分に答へられたとは云へない。何故なれば、本來内容と形式とは、相離れて若しくは全く相對立して在るのではなくして、内容は形式の内容として在り、形式は内容の形式として在るのであり、従つて内容が多種多様であるとき、形式がすべて同一であることは到底許され得ないからである。社會の形式的な經驗においても、原始人とわれわれでは、必しも同一ではない。例へばホルドといふ社會形式に關する經驗はわれわれには無く、國民といふ社會形式に關する經驗は原始人には無い。しかし同時に、原始人とわれわれとの社會の形式的な經驗には、同一のものがなくてはならないことも、また疑ひの餘地がない。何故なれば、これが全く存在しないとすれば、形式が内容から區別される窮屈の根據は解消されて、原始人とわれわれとの社會的經驗は、その懸絶せる内容的な經驗のまゝに、全く切斷された異種のものとなり、兩者を等しく社會的經驗と呼ぶ理由は、何處にも見ひ出され得なくなるからである。ここにおいて社會の形式にも、亦二様の區別が認めら

れることになる。すなはち一つは社會の本質的な形式であり、いま一つは社會の基本的な形式である。前者は、その時々の社會に本質的な形式であり、従つてこれは明らかに原始人とわれわれとは相異なるものであるが、これに對して後者は、それらの本質的な形式に共通な、一層正確に云へば、それらの形式の基本たるべき社會の形式であり、これは原始人とわれわれとにおいて全く同一のものである。例へば原始人が、その社會の本質的な形式として、聚落といふ地域集團を持つてゐるのに對して、われわれは、社會の本質的な形式として、都市または村落といふ地域集團を持つてゐる。しかし地域集團といふ社會の基本的な形式を持つと云ふ點においては、彼等もわれわれも同一なのである。

若しも右の解釋が正しいとすれば、原始における社會的經驗に通する現在の社會的經驗とは、單なる社會的經驗そのものでもなければ、また社會の本質的な形式に關する經驗でもなくして、實に社會の基本的な形式に關するわれわれの經驗であると云はねばならず、斯かる經驗のみが、起源の臆測における眞に理性的なる導線の結びつくべき基體なのである。

しかるに社會の基本的な形式は、いま指摘したやうにその時々の社會の本質的な形式に共通な基

本たるべきものであるが故に、それは人間の社會的行爲の結果に現れるものではなくして、却つて彼等の社會的行爲を可能ならしめる基體たるべきものであり、人間の社會的行爲のいま一つの基體たる人間の生存と共に在るところの、社會の基本的な構造なのである。すなはちそれは、いつ、いかなる場所においても、人間の生存と共に在つて、彼等の社會的行爲を可能ならしめるものであり、従つてわれわれはそれに基いて動くことは出來ても、それをつくることの出來ないものである。云ひかへれば、われわれの社會的行爲は、われわれの生存と共に在る社會の基本的な形式によつて初めて可能ならしめられると共に、われわれは、斯くて可能ならしめられた社會的行爲によつて、社會の基本的な形式に對してその時々の社會の本質的な形式をつくりゆくのであるが、その基本的な形式そのものには何等の削減も附加も行ひ得ないのである。斯くの如き社會の基本的な形式としては、集團が指示さるべきであらう。蓋し集團なくして社會はなく、また人間の生存も在り得ないからである。起源の臆測における理性的導線の基體は、集團に關するわれわれの經驗の検討において、初めてその實體を明らかならしめられるのである。

しかるに集團の性質については、その稍々詳しき解説を、私は既刊の本誌に述べて置いた。⁽²⁾ いま

は、ここに必要な最少限度において、その骨子のみを述れば次の如くである——

集團は、多くの學者によつて、用語並に解釋の上に多少の相異こそあれ、その意味に従つて凡そ次の三つの主要類型に大別されてゐる。(一)血族集團、(二)地域集團、(三)活動集團。すなはち第一のものは、血の共同を意味として持つ集團であり、その統一性の形づくる行爲の圈は、例へば氏族であり、家族である。人々が氏族や家族の成員として在るとき、彼等の行爲を等しく貫くものは、血の共同の精神であらう。同様に第二のものは、土地の共同を意味として持つ集團であり、その統一性の形づくる行爲の圈は、例へば村落や都市である。村民や市民の行爲をつなぎ合せてゐるものには、土地の共同の精神である。これらに對して、第三のものは、固より活動の共同を意味として持つ集團であるが、活動の共同は職業の共同と勞働の共同とに分化されるので、その統一性の形づくる行爲の圈も亦、職業の共同を契機とするもの(同業者の交際圈)と勞働の共同を契機とするもの(同僚の交際圈)とに別かたれるのであり、これらの行爲の圈に在るもののが行爲は、仲間の精神によつてつなぎ合されるのである。

しかし集團の主要類型は、果してこの三つのものに盡きるであらうか。

人間は、人間の中に生まれ、住み、働く。血と土地と活動との共同なきところに、人間の生存

は無い。血族集團と地域集團と活動集團と——これらの集團の持つ意味は、いづれも人間の生存にとつて必然的な契機に根ざしてゐる。従つて如何なる人間も、彼の生存において、常に同時にこれら三つの集團の成員なのである。しかしこれら三つの集團は、斯くの如くに凡ゆる人間の上に交叉してゐるばかりではない。それら自身が、また相互に深く交叉して、初めて存在するのである。例へば家族は、決してそれ自身で存在するものではなく、村落か都市かに在つて、また何等かの活動集團に關與して、初めてそれ自身で存在を確保することが出来るのである。この關係は、村落や都市についても、また同業者や同僚の交際圈についても、全く同様に指摘され得るのである。然らば斯くの如き集團そのものの交叉は、如何なる根據に基いて可能なのであらうか。若しもそれらの集團が、夫々にそれ自身で存在し得るものであるならば、それら相互の交叉は、單に夫々の集團の作用が形づくる關係に過ぎないものであらう。しかしそれ自身においては存在せず、他との交叉においてそれ自身の存在を確保する集團相互の交叉においては、その交叉そのものが、既に夫々の集團の存在の本質に屬するのであつて、決して單なる集團の作用から派生するものではないのである。従つて斯くの如き集團相互の交叉を可能ならしめる根據も亦、夫々の集團の單なる作用の裡にではなく、それらの存在を可能ならしめてゐる意味の關聯の裡に求められなくてはならない。しかるに

さきに指摘されたやうに、それらの集團の存在を可能ならしめてゐる意味は、いづれも等しく人間の生存にとつて必然的な契機に根ざしてゐるのであるが、それらの契機は、相集つて人間の生存を可能ならしめるものであると同時に、本來人間の生存そのものにおいて共に在るものである。すなはち血と土地と活動とは、生存の共同において、初めてそれら自身の存在を確保すると共に、そこに相集つて共同の生存すなはち生活を可能ならしめてゐるのである。従つて斯くの如き生存の個々の契機に根ざす集團の意味も亦、それらの存在においては、生存の共同といふ意味のもとに、相關聯して共に在るのである。云ひかへれば、血の共同も土地の共同も、更には活動の共同も、これらはすべて生存の共同の下に初めて存在し、そこに交叉して在るのであつて、生存の共同なきところに、これらの共同の存在を認めるのは、大地や太陽を離れて植物の存在を考へるに等しいのである。従つて彼の存在と行為とを血の共同と土地の共同と活動の共同とによつて必然的に規定される人間は、また必然的に生存の共同によつて彼の存在と行為とを規定されるのであり、人間の單なる生存は、生存の共同によつて、眞の生活へと進み得るのである。こゝに生存の共同を意味とする。を持つ第四の集團が指摘さるべきであらう。これは、かの生存必然的な三つの集團を包んで在ると共に、それらによつて貫かれて在る生活必然的な集團であり、私はこれを「生活集團」若しくは

「ポリス集團」と名付けて置く。生活集團の統一性が形づくる行爲の圈は、例へば民族や國民であり、民族や國民の一員としてのわれわれの行爲をつなぎ合せてゐるものは、生存の共同の精神である。血族集團と地域集團と活動集團とが相互に交叉して在るのは、斯かる生活集團においてであつて、例へばわれわれの家族や都市や同業者は、日本國といふ生活集團に包まれて在ると共に、それを貫いて在るのであり、斯かるものとして、それらは相互に深く交叉してゐるのである。

却説、われわれの社會的經驗における集團の性質が、以上の如きものであるとすれば、社會の起源に對する學問的な臆測は、これに基いて、且つこれにのみ基いて、初めて眞に理性的に導かれ得るのである。

この社會の基本的な形式は、それが人間の生存そのものと共に在るものである限り、社會の在るところには、到るところに見ひ出さるべきものであり、原始の社會と雖も、固よりその例外をなすものではない。すなはち如何に原始の社會と雖も、それが社會である限り、そこには必ず右に掲げた四種の集團の何等かの成層が現はれてゐなくてはならないのである。従つて單なる血族集團としての家族のみに社會の起源を指摘するが如きは、既にそれ自體許され難き一面的な抽象である。家

族は決してそれ自身で存在するものではない。いま、何等かの家族に、正しく社會の起源を指摘しようとするならば、その家族そのものの解明と共に、それが同時に如何なる地域集團と活動集團と生活集團とに重なり合つてゐるかを明らかにしなくてはならない。社會の起源に所謂ホルドを指摘することは、この意味においては、そこに單なる家族を指摘することよりもすぐれてゐる。何故ならば、ホルドは、血族、地域、活動、生活の四集團のいづれの性質をも、それ自身の裡に含んでゐるからである。しかし一步を進めてみると、社會の起源にホルドを指摘するだけでは、未だ不充分である。何故なれば、ホルドにおいては、四集團の共在は認められても、それらの成層は極めて不明確であるからである。今日われわれに知られてゐる報告は、社會の起源に、もはやホルドの如き不明確な規定を與へる必要のないまでに達してゐる。いま、それに基いて原始の集團を瞥見すれば、血緣集團は單婚家族 (Monogame Famille) か對偶家族 (Paarungsfamilie) として現はれ、地域集團としては、聚落が指摘され、活動集團は性的分業圈と年齢別分業圈とに分かたれてゐるのであり、これらの三集團を包み且つこれらによつて貫かれてゐる生活集團は、種族 (Stamm) として、一定様式の器具を今に残してゐるのである。

斯くて社會の起源に對する學問的な臆測は、斯くの如き種族においてその限界に到達するのであ

る。社會の起源は、種族以前でもなければ、況んや後以後でもない。而して種族の性質を更に闡
測せしめる理性的な導線は、種族の發展としての民族や國民の性質の裡に在るのである。「原始反
終」(始めをたゞねて終りにかくる) ふるい蘊藏が在る。やぐて現象は、心の始めに終りを含み、
またその終りに始めを含んでゐる。社會の起源は、現在の社會の原型でなくてはならない。すなは
ち現在の社會の原點としての種族のみが、社會の眞の起源なのである。

- (1) I. Kant, *Muthmasslicher Anfang der Menschengeschichte*, 1789, (Akad. A. VIII, S. 109—110.)
- (11) I. Kant, a. a. O., S. 109.
- (111) A. Comte, *Cours de philosophie positive*, (par E. Littré, troisième édition, 1869,) IV, p. 342.
- (111) vgl. J. Bachofen, *Das Mutterrecht, eine Untersuchung über die Gynäkokratie der Alten Welt nach ihrer religiösen und rechtlichen Seite*, Stuttgart 1861.
- (111) vgl. L. H. Morgan, *Ancient Society*, London, 1877.
- (111) W. H. Rivers, *Kinship and Social Organisation*, London, 1914, p. 88.
- (111) 素遠「社會統治の體制」——「報酬」第11回註近義。ヤド風——ベテ風參照。
- (111) Maunier, *Essais sur les groupements sociaux*, Paris, 1929, p. 12.
- (111) 佐藤「新「社會學」新譜」中べ。
- (111) ハーバード「國家學」青木譜譯、第一書房版 11回——大販參照